

第12回 途上国に援助すると、日本にとってどんないいことがあるのですか？（高校生、兵庫県）

著者	山形 辰史
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	IDE スクエア -- コラム おしえて！知りたい！途上国と社会
ページ	1-4
発行年	2019-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00051512



第12回 途上国に援助すると、日本にとってどんな いいことがあるのですか？（高校生、兵庫県）

2019年12月

(2,817字)



発展途上国への援助は、もう長い間行われていると聞きました。中国などの新興国や国連も援助をしているのに、日本は日本にとってどんないいことがあるから援助を続けているのですか？

なるほど、「いいこと」についてですね。何かをするときに、「別の何かいいことが得られるからする」（目的追求型行動）という場合と、「それ自体がいいことだからする」（価値追求型行動）という場合の2つがあります。人は場合によって、そのどちらか、またはそれらの両方を追求するものです。「援助」については、どちらが当てはまるのでしょうか。

何のために援助するか？

イギリスにデイビッド・ヒュームという国際開発学者がいます。彼の名前は18世紀の哲学者との名前と似ているので、「間違われやすいんだ」と本人は照れていました。

ヒューム先生は、先進国の人々が開発途上国に援助する理由を以下の4つに分類しています。

ヒューム先生による援助の理由

1. **道徳的義務**：困っている人を助けるのが人の道だから
2. **道義的責任**：現在の開発途上国の貧困は、先進国が過去に行ったこと(例えば植民地支配)の帰結だから
3. **共通利益**：援助によって開発途上国が繁栄することは、回り回って援助供与国にとって間接的な利益になるから
4. **自己利益**：政府開発援助が、自国の製品の供与などを通じて、援助供与国の企業や国民に直接的な利益を与えるから

(注) この表は、紀谷昌彦・山形辰史『[私たちが国際協力する理由——人道と国益の向こう側](#)』日本評論社、2019年、表1.1(19ページ)を平易に書き改めたものである。
原典：David Hulme, *Should Rich Nations Help the Poor?*, Polity Press, 2016 (佐藤寛監訳、太田美帆・土橋喜人・田中博子・紺野奈央訳『[貧しい人を助ける理由——遠くの子とあなたのつながり](#)』日本評論社 2017年) (邦訳 16-26ページ)。

最初に挙げた「道徳的義務」というのは、有利な立場にある人が不利な立場の人のために何かをすることは、「それが人の道だから」ということを意味しています。これは援助が「それ自体意味があるから」する、ということです。私自身は、政府が行う国際協力であれ、非政府組織(NGO)が行う国際協力であれ、企業が行う国際協力であれ、多かれ少なかれ、この「やるべきことだからやる」という精神が根底にある、と思っています。

これに加えてヒューム先生はさらに3つの理由を挙げています。「道義的責任」とは、特に16世紀から20世紀に至るヨーロッパ諸国やアメリカ、日本などによる他国の植民地化が、植民地にされた国々に対して及ぼした、推し量ることができないほど多大な損害に対する補償のごくごく小さな一部として、援助がなされるべきだ、ということの意味しています。

「共通利益」とは、ことわざで言うところの「情けは人の為ならず、めぐりめぐって己がため」という意味に近いかと思います。例えば、どこかの国に対して日本が援助を行ったとして、その援助が一つの要因となってその国が発展し、そのことによっていずれは、その国と日本との協力関係が強固になる、といったことが該当します。この場合、「めぐりめぐって日本のためになる」という結果に至るプロセスはかなり間接的で時間がかかり、「忘れたころに、利益がもたらされていたことに気づく」といった結果になるかもしれません。

最後は、もっと直接的な「自己利益」です。具体的に言うと、しばしば政府開発援助は、物資を供与する形で行われます(例えば、食料、医療器材、建築資材などです)が、それらに自国製品を用いれば、それを生産した自国企業の売り上げが増えることとなります。または援助の見返りとして、外交関係における何らかの政治

的立場への協力（国連の場で日本の提案に賛成票を投じる等）を求めて、実際に投票などの形でその援助受入国からの協力が得られたとしたら、それは「自己利益のための援助」と言えるでしょう。

これらの4つの理由のうちのどれを重視するかは、あなた次第だと思います。私には私の考えがあります。私自身は道徳的義務や道義的責任を重視していますが、その意見は他人に押し付けるものではなく、自分自身の考えとして深めるものだと思っています。ですからここから先、日本の政府開発援助に関して、ご自身が何を重視して行動するか、そして、他人に対してどういう意見を述べ、自分が議員に立候補したり、あるいは候補者に投票したりするときに、どういう意見を表明するかを、自分の問題として考えていただきたいと思います。

あなたは何人（なにじん）か？

もう一つ考えていただきたいのは、自分が何人（なにじん）なのか、ということです。この問いに対する答えは複数あるのが普通です。例えば私は大分県別府市に住んでいますので、別府市民であり、大分県民であり、日本国民です。それに加えて、私はアジア人でもあり地球人でもあります。もし宇宙以外に生物の住む世界があったなら、その世界に住む生物から私は「宇宙人」と呼ばれることでしょう。ここまでは地域的な広がりから自分の「所属」を整理しましたが、それ以外の所属もあることに気づきます。例えば私は山形家という家族の一員であると同時に、国際開発学会の会員であり、立命館法人の社員であり、別府市鶴見ヶ丘地域のバスケットボールサークルのメンバーでもあります。このように一人の人が、重なり合ういくつかの社会に同時に属しているのは普通のことです。質問した方は、それらのいくつかの中から、どうして「日本」という社会を取り出して、「日本にとってどんないいことが」と問いかけたのでしょうか？ 自分が「地球人である」という属性を重視したとしたら、「地球人が、他の地球人のためになることをする」ということがより自然に感じられないでしょうか？

日本の政府開発援助は、日本政府が日本人に代わって行う活動です。日本人が「地球のために行ってほしい」という思いを込めるのであれば、日本政府は「地球のために」行うべきです。ですから我々（この場合は日本人）が、どんな思いを込めるかが問われます。さて、あなたはどんな思いを込めますか？ ■

回答：山形辰史（やまがたつふみ）

回答者プロフィール

山形辰史（やまがたつふみ） 立命館アジア太平洋大学教授。経済学博士。専門
は開発経済学、バングラデシュ経済。おもな著作に、紀谷昌彦・山形辰史『**私た
ちが国際協力する理由——人道と国益の向こう側**』日本評論社（2019年）、黒崎
卓・山形辰史『**開発経済学 貧困削減へのアプローチ**』（増補改訂版）日本評論社
（2017年）、高橋和志・山形辰史編『**国際協力ってなんだろう 現場に生きる開
発経済学**』[岩波ジュニア新書 668] 岩波書店（2010年）など。

